HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「異」文化を「越える」ために：ある授業実践とその内省 : 2008年度「異文化理解と多様な世界」講義の記録から
Author(s)	齋藤, 眞宏
Citation	異文化間教育学会第29回全国大会. 平成20年5月31日～平成20年6月1日. 京都外国語大学、京都府京都市.
Issue Date	2008-06-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/39981
Type	conference presentation
File Information	saito_IESJc29.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「異」文化を「越える」ために
:ある授業実践とその内省

—2008年度「異文化理解と多様な世界」講義の記録から—

異文化間教育学会

2008年6月1日

於　京都外国語大学

旭川大学　齋藤眞宏

1-1. 異文化間理解の講義と映像教材：私の場合

①異文化間理解の講義における「壁」
生徒や学生の表面的／建前上の理解
（理由）

- 異文化間教育で扱う内容は往々にして一人の教師の経験を超えているので生徒や学生にとってはリアリティを感じない。
- 学生／生徒たちも限られた経験しか持っていないために、他者の経験を想像しながらリアリティを持って学習することは難しい。

→教師が語りすぎてはいけない（＝私の経験知）
→映像教材の利用へ

1-2.異文化間理解の講義と映像教材：私の場合

映像教材利用の注意点

①製作者側の意図や主観性、偏見が含まれている

②学生たちもその映像をそれぞれの意図や主観性、偏見に基づいて解釈

③利用する教師（＝私）としても自身の意図、主観、偏見と無縁ではない

→したがって<u>教師は「必要最低限の介入」が必要</u>

（その事柄に対する多様な視点／相反する視点の提供）

2. 学生観

① 「異文化理解」に関しては肯定的なイメージを持つ学生が多い。

② 自らの経験に基づいて、「私たち」「あの人たち」という二項対立で捉える傾向がなかなか捨てきれない。（例　アイヌと日本人）

③ 北海道生まれ育ちの学生が大半であるが、アイヌ民族についての知識は乏しい。

④ イオマンテにおける仔熊を殺す行為に対して、一方的に、感情的に否定する傾向にある。→支配者側の論理に無批判、気づいていない

⑤ ②にも関係しているが、学生たちが「あの人たち（この場合、イオマンテを実施したアイヌの人々）」と判断した人々に対して共感を抱けない。

3-1. 講義について

(1)講義目標

異文化の「異」を乗り越えるために、「出会い」「見つめ」「語り」「つながる」きっかけをつかむ。

(2)講義計画

１講　オリエンテーション、「異文化」と「自文化」

２講　二人の韓国人留学生の学び

３講　イオマンテと「アイヌ」と「和人」（本時）

4講　アイヌ民族と国民国家日本

5講　「共生」について、エッセー形式の試験

3-2　講義について

(3)　本時の概要

本時の目標：アイヌ民族の伝統儀式であるイオマンテに対して、二つ以上の視点から捉えることができる

評価の観点：各学生のイオマンテに対する観点の多様性を、エッセーレポートによって評価する

①導入

旭川近郊のアイヌ語地名（近文、比布、富良野、美瑛）

違星北斗の短歌「アイヌと云ふ新しくよい概念を内地の人に与へたく思ふ」

②展開－１

・イオマンテについて

・イオマンテと「和人」

・イオマンテと「アイヌ」

3-3　講義について

展開−2　映像視聴

「日本の姿第7巻イヨマンテ　熊おくり一北海道平取町二風谷」（民族文化研究所編、1977、紀伊国屋書店）

教師からの働きかけ

「皆さんは、このビデオに出てきた二風谷の人たちのように感謝をささげて、肉や魚を食べたことはありますか？」

展開−3　動物たちの命と私たちの生活

・現在の日本社会における熊の年間捕獲数

・和歌山県太地のイルカ猟

・カナダのアザラシ猟

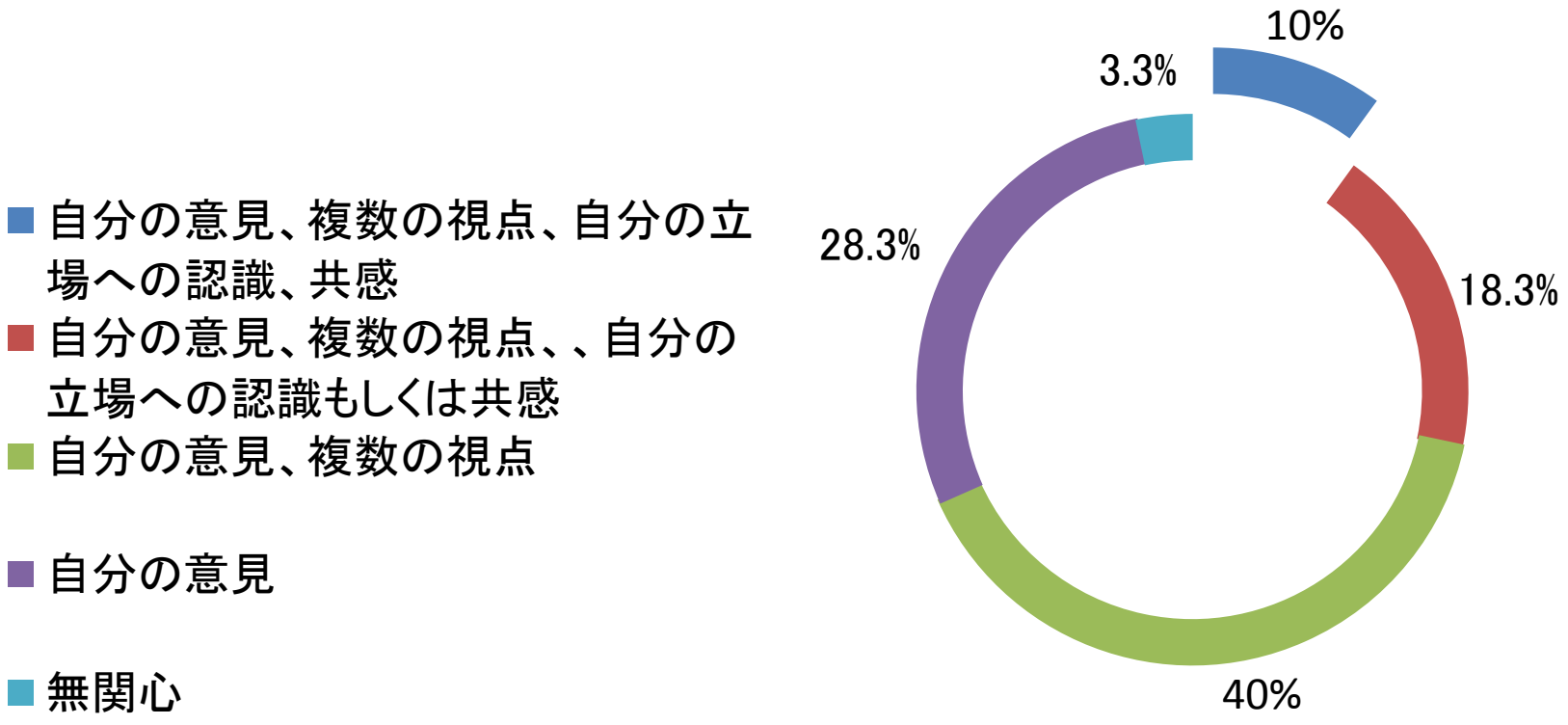
→私たちの生活は生命を頂いて成立している

③　まとめ：ディスカッション＋エッセーレポート

あなたはアイヌ民族が自分たちの大切な文化としてイオマンテ（仔熊を「送る」過程も含む）を継続していくことに賛成ですか？反対ですか？その理由も述べなさい

3-4　学生の学び

第3講終了後（2008.4.23）



４．4講および5講の講義概略

①4講　アイヌ民族と国民国家「日本」

- 前回の学生意見の共有化（添付資料）
- 「アイヌ」と「和人」：日本人二重構造説と「差別されるもの象徴としての『アイヌ』という呼称」

「俺はアイヌ系日本人だけど、お前は何系日本人だ？」

- 国民国家「日本」における同化政策とアイヌ民族
- ビデオ視聴：「アイヌの結婚式」（民族文化映像研究所編、1972、紀伊国屋書店）

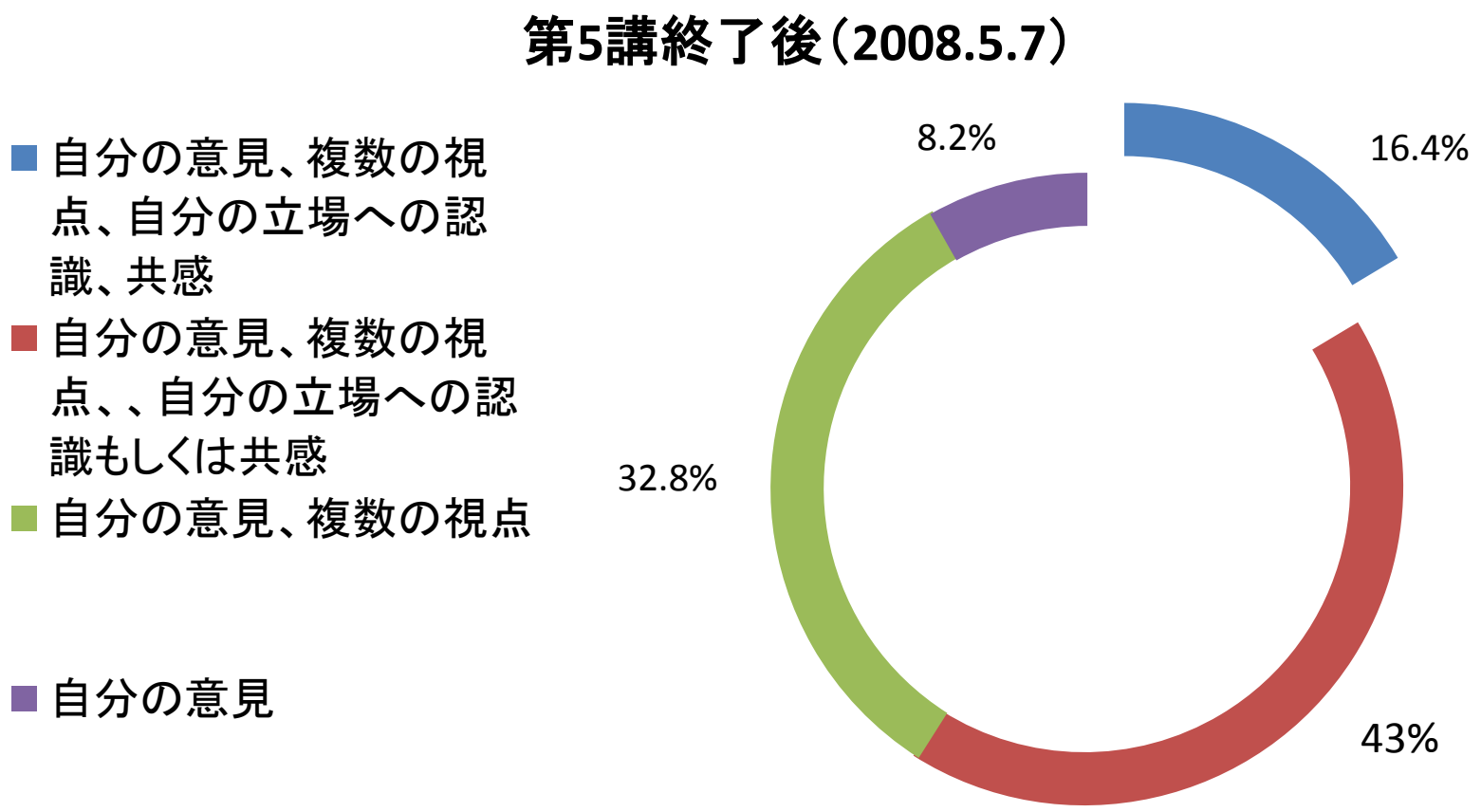
※アイヌ女性の小山さんの結婚式のドキュメンタリー

②5講　「共生」について

- 違星北斗の短歌
- DVD視聴：アイヌレベルズのラップ・ミュージック（ NHK　ETV特集「僕たちのアイヌ宣言～“民族”と“自分”のはざまで～」（2008年1月13日放送）から）
- 「共生」と社会における「非寛容の構造」

・エッセー試験：「異文化間理解の視点から（仔熊を殺す過程も含めた）イオマンテの継続について論ぜよ。賛成／反対の立場は評価には影響しない」

5. 最終的な学生たちの学び



６-1. 個々の学び：学生Aの場合

[第3講]

（略）反対です。クマを殺すのはひどいと思いました。自分たちも肉とか平気で食べたりしているけどすごくいやな気持になった。クマを殺すのは良くないと思った。いくらぎしきといってもぐろくていやです

[第5講]

（略）異文化なんて簡単に受け入れられるとか思っていたけど実際他の民族の事をちゃんと知ったら簡単に受け入れられるなんて言えないなって思った。だから他民族同士のくい違いや争いがおこるんだなってわかった。どっちかがあきらめて受け入れればいいのにと思っていたけどできないこともあるって知れた。（略）さんせいも反対もできない。

6-2　個々の学び：学生Bの場合

[第3講]

反対。熊を意味もなく殺すのはダメだと思う。仔熊と遊ぶっていうケド、実際熊は嫌がっていたし、人間のただの自己満としか思えなかった。儀式を行う理由もなぞだと思った。（略）アイヌ人は何をやってたのか不思議に思う。死んだ後も、熊の体を散々いじりはじめてるし、もォ最悪だと思う。こんなもの早くやめた方がいい。（略）命は、たとえ人間じゃない熊だったとしても、大切にしないといけないと思う。熊にとっちゃいい迷惑だ！！

[第5講]

（略）イオマンテという儀式は、何も知らない私たちの立場からしてみれば、意味のない行為に思えても、アイヌ民族にとっては、熊が神様であると信じ、神様への奉仕のためにやっていて、伝統的に受けつがれていかなければならない大切な儀式なんだと考えるようになりました。（略）思想は、様々であり、それを、その人の立場にならないまま反対するのはだめなことだと思いました。また意味もなく罪のない命をぎせいにしてしまうことがひどいと思っても、自分達も、それをせめることなどできないことを悪気なく日常的にやっている。それを考えれば、アイヌ民族が伝統儀式としてやっているコトは大切なことでかかせないものなんだと思います。

個々の学び：学生Cの場合

[第3講]

（略）イオマンテに反対です。イオマンテは、今の日本（北海道）でやるべきことではないと思ったからです。動物愛護の面から、教育の面から、あまりいい儀式ではないと思いました。確かに昔は普通にやっていたことかもしれないが、現代で通用するのか疑問だし、少なくてもこの儀式をやり、神に祈るということは今の私たちはやらないことだと思いました（略）

[第5講]

私は、イオマンテを実施することは、反対である。現代に生きる私は、どうしても仔熊を殺すことを理解できないからである。私は北海道に18年間、住み続けているがアイヌの人のことは全く知らない。（略）こんな自分がアイヌの古くからの伝統を否定できるわけがないが、私はイオマンテの行為については反対する。（略）現在私たち人間は熊を見世物として扱う。（熊牧場や動物園）しかしその反面、人里にあらわれる熊を殺してしまうこともある。時と場合によって、熊への対応はまったく異なる。でも、熊が人里にあらわれるようになったのは、人間が自然を壊してしまったからであると思える（略）確に、「伝統」は大切である。しかし何かを殺すのを見世物にするということが今の現代に通用するかと考えれば疑問である。（略）

7. 学習援助者としての気づき

① 学生は「受容できる異文化」と「受容できない異文化」に分けて考えている。

② 「アイヌは残酷」などの一方的な言い方はしていない。ただし一部の学生に「異なる者」（アイヌを含む）を意識させる他者に対する拒否反応、抵抗感がある。

③ 「和人」VS「アイヌ」という強い二項対立的意識。

④ 「異文化」の「異」に学生自身を近づける教師からの「働きかけ」の重要性

⑤ 「ユニーク」な反応をする学生に対してどのように対応するか？私の教員としてのアドバイス力、コメント力の向上が重要。

参考資料　あるユニークな学生の反応①

[第3講]

賛成　イオマンテをやった所で、私の生活には何ら影響はない。したがって、継続したっていいと思う。イオマンテには貴賓がくるそうだが、その諸費用は、我々の税金から出されるのだろうか。もしそうであるなら反対です。熊に同情はしません。なぜなら、動物はばい菌を持っているからです。人間に危害を加えるような熊を殺してくれるアイヌの方々は、ある意味「神」です。

参考資料　あるユニークな学生の反応②

[第5講]

「農民は農民らしく」という言葉がある。アイヌはアイヌらしくするべきだ。世の中を動かしているのは「大衆文化」だ。文化を異にする人々が共生するためには、互いに理解するべきだ。人間には集団性があり、1つ文化だけでの孤立はあり得ない。文化は影響されたり、したりで存続している。日本文化（和人）だって、異文化の影響を受けている。高度な成長を遂げるためには、他文化と融和するべきだ。この世に粋な文化は存在しない。異文化を理解するには、大衆文化に触れることが必要だ。大衆文化を創造する人間が、世の中の価値観を創造しているのだ。大衆文化を理解することは、異文化理解につながる。「パンと見世物」という言葉がある。ショパンの演奏会は最初は興行であった。今となっては文化として教科書に掲載されている。興行としてアイヌを見ることは異文化理解に過ぎない。大衆文化はいずれ文化になる。したがって、興行としてイオマンテを継続することには賛成です。アイヌはアイヌらしく。和人は和人らしくすることで、知らず知らずのうちに共生してゆける。

８．来年の講義に向けて検討すべき課題

① 情報過多だったのではないか？

② 同じ映像を見ても学生によってまったく印象が異なる。→講義の中で「確認作業」が必要か？

③ 情報の「送り手」（製作者、映像使用者としての私）の視点に学生たちが自発的に気づく機会を提供する必要か？

④ 「対等な関係」「双方向性」を志向しても、どこまで授業実践という場でそれが可能なのか？

→学生の偏見を揺さぶるためにある「一面」を強調した結果、学生たちを新たな一面的な見方に誘導する結果につながった。

⑤ 評価の質をどのように高めるのか？つまりどのように「次」につなげていく評価をするのか？

参考文献
・Dewey, J., 1997, *Experience & Education*, New York: Touchstone, p.59
・榎森進、2007『アイヌ民族の歴史』草風館
・Harnell, B., “Covert operation finally exposes Taiji’s annual dolphin horror,” Japan Times, (2008年3月31日)
・開発教育協会編2004『レヌカの学び』
・萱野茂、佐々木高明ほか、1997『アイヌ語が国会に響く』草風館
・環境省ホームページhttp://www.env.go.jp/nature/yasei/kuma_number/capture_h19-qe.pdf
・倉地曉美、1998『多文化共生の教育』勁草書房、pp.39-43
・Ljunggren, D., “Canadian seal hunters decry ‘savage’ reputation,” Japan Times, (2007年3月23日)
・松下一世、1999『子どもの心がひらく人権教育』解放出版社、pp.11－12
・小川正人、1997「イオマンテの近代史」、札幌学院大学人文学部編『アイヌ文化の現在』札幌学院大学生活協同組合、第7章
・太田満、2005『旭川アイヌ語辞典』アイヌ語研究所、p.68
・曽和信一、2004『人権教育としての「同和」教育と多文化教育』明石書店、pp.30-36
・塚本美恵子、2006、「『利用メディアの調査』から見た異文化間教育の現在」、異文化間教育学会編『異文化間教育』23、異文化間教育学会
・塚本美恵子、2007「日本の異文化間教育学の現状と情報メディア」『平成16年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究B(1)　異文化間教育に関する横断的研究―共通のパラダイムを求めて―』（研究代表者　小島勝）
・由良勇著、2004『上川郡内石狩川本支流アイヌ語地名解』北海道出版企画センター

使用した映像教材
・民族文化研究所編、1971「日本の姿第１巻アイヌの結婚式－北海道平取町二風谷」、紀伊国屋書店
・民族文化研究所編、1977「日本の姿第７巻イヨマンテ　熊おくり－北海道平取町二風谷」、紀伊国屋書店
・NHK　ETV特集「僕たちのアイヌ宣言～“民族”と“自分”のはざまで～」（2008年1月13日放送）